

第二部 快樂都市

BALLAD FOR A

WARRIOR

BALLAD FOR A WARRIOR

バラード

戦士の挽歌

大藪春彦



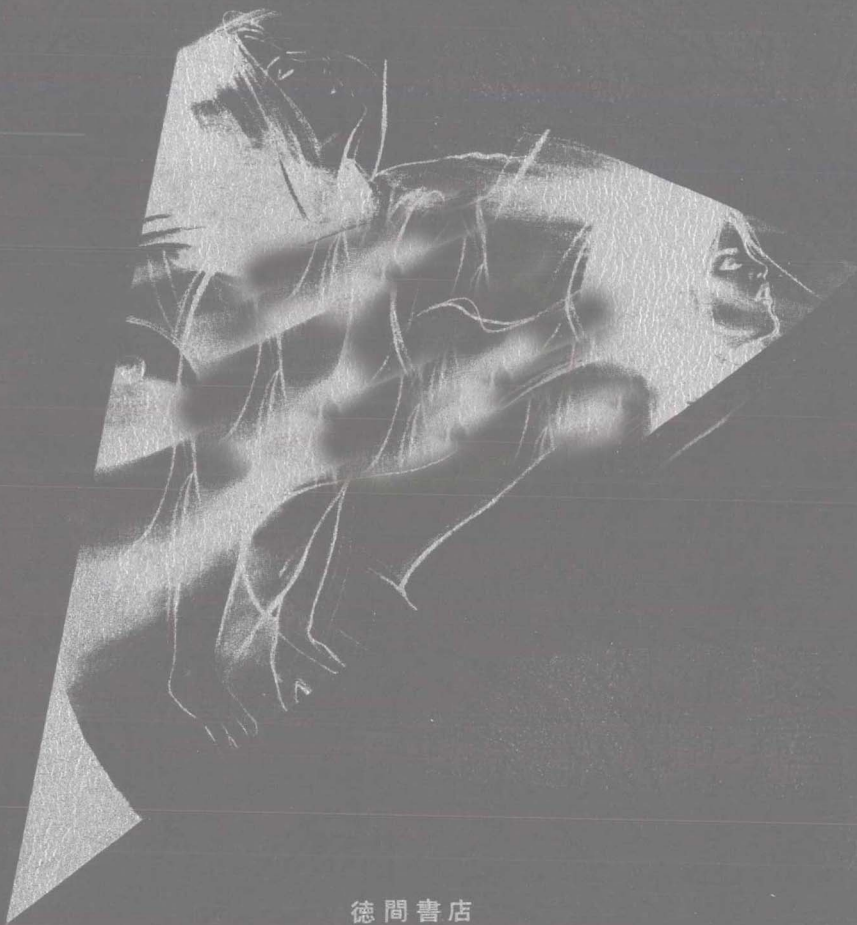
BALLAD FOR A

バラード

の挽歌

WARRIOR

大藪春彦



徳間書店

戦士の挽歌

バラード

第二部 快樂都市

1981年11月30日 第一刷

定価は帯・カバーに表示してあります

著者 大 藪 春 彦

発行者 徳 間 康 快

発行所 株式会社 徳間書店

東京都港区新橋四の一〇

電話東京(43)六二三一(番代表)

振替東京四一四四三九二番

(乱丁・落丁本は本社またはお買い求めの書店にてお取り替えます)

編集担当 萩原 実

印刷・製本／凸版印刷株式会社

© 1981 Haruhiko Oyabu Printed in Japan

ISBN4-19-122376-3

戦士の挽歌^{バラッド} ● 目次

魯迫	66	134	惡に「聖」の字
買収交渉	59	127	渡水走行
将校クラブ	52	120	釣り場
芸術銃	44	112	コーチ
切札の女	36	105	諍 いさめ い
モルモット	28	97	手数料
執刀狂	20	90	小切手
敷地二十万坪	12	81	三十万カプセル
偽造	5	74	トンビ

第一部《殺しの序曲》あらすじ

石川克也、三十二歳。第一次ベビー・ブームに生まれ、横浜の宝石店の息子として育った。私立大学の独文科に在学中、大学闘争のバリケードのなかで両親と妹が店の支配人に殺されたことを知る。

債鬼に追われ、やむなく大学を中退した克也は恋人であった中学教師、有馬絹子のマンションに駆け込み、就職口を探した。大学中退の彼がやっと就職できたのは、薬品問屋の大黒天だった。しかし、絹子は交通事故に遭って急逝する。克也は大黒天を辞め、保険金六千万円を手にとヨーロッパに旅立つ。約二年間のヒッピー生活を送ったのち、日本に帰国。新東京製薬に自分を売り込んだ。

いま、克也はこの会社の腕利きプロパーだ。立川支社に勤務し、北多摩地区をテリトリーとする。熾烈な売り込み合戦の渦中にあつて、冷酷で狐独な克也は一匹狼として医・薬業界の荒野を彷徨している。人並みはずれた肉体の持主である克也は、ガンとドライヴイングの名手だ。セックスに飢えた女医や看護婦を虜にしてい

そして、克也は北多摩ナンバーワンの大病院、安富病院に攻撃をかける。実権を握っているのは、この病院の理事長で土地成金の安富忠治。息子の政治が院長だ。乱診乱療の権化、医は算術をモットーに大儲けしている。克也は忠治父子を接待するため女術^{ゼゲン}まがいの役までつとめて、十六歳のブロード娘、キャッシーを政治に抱かせる。

さらに克也は汚職医大、国立北多摩大学付属第一病院に食い込み、マゾで女形^{オカマ}の西尾助教の相手をつとめる一方、大京医大の秋山教授と松本助教を中野新橋に連れ出して芸者を抱かせ、巨額の契約を結ばせることに成功した――。

偽造

1

五階の理事長室にエレヴェーターで昇る前に、事務長中沢は事務局の自分のデスクの上から、大きな書類入れを取上げた。

院長室に隣りあった理事長室のドアをノックした中沢が、インターフォンを通じて、

「理事長先生、新東京の石川君を連れて参りました」

と、言うとき、安富忠治が、

「おう、来たきやあ。まあ、入れや」

と、答える。

広い理事長室の棚には、古代中国や朝鮮の壺が並べられてあった。そして理事長安富忠治は、宝石と貴金属だらけの装身具を光らせていた。

最敬礼した石川克也は、棚の壺を見直し、

「素晴らしいコレクションですね。心が洗われる気がします。いや、実に素晴らしい」

と、お世辞を並べたてる。

「ここに置いてあるもんだだけでも十億じゃきかんちゅう、専門家の折紙付きじゃ。俺あの屋敷には、この何十倍ものコレクションがあるけんどもよ」

小柄なチンパンジーのような忠治は胸を反らせ、葉巻の吸い口を銀のシガー・カッターで切った。

石川は封筒から、クラシックな銀のダンヒルのオイル・ライターを出して点火した。腰をかがめながら忠治の葉巻に火をつけてやり、

「理事長先生、このライターをお使いください。ボストンの名門出身の米軍将校が持っていたものです。前々から理事長先生に差し上げたくて、何度も売ってくれるように交渉してのですが、やっと昨日、売ってもらえたのです」と、勿体づけ、デスクの上に置く。

「おう、こりや珍しいクラシックなものじゃな。俺あの有名な名門の出の持主にふさわしいのう。有難とよ」

忠治はそのライターをひねくり回した。

「それでは、そろそろビジネスの話に入りましょうか？」

中沢が口をはさんだ。

「ええとも、ええとも——」

忠治は言い、声をひそめて、

「政治の相手のように若くなくてもええ。ハイチーンでもええから、本物のブロンドのヤンキー娘を俺あに回してくれたら、政治と話しあつて決めた購入量にイロをつけてやるべえよ」

と、石川に言う。

「本当ですか？」

石川は囁いた。

「ああ、俺あは出鱈目イングリッシュで通すけん。お前さんは別室で待つとるだけでええわい」

「分りました。それでは、さつそく明後日の夜でも……明日は日曜ですのう」

「おう、なるべくでっかい娘がええな」

「承知しました」

「じゃあ、商談といくべえ。例の納入用紙や領収書の用紙は用意してきたか？ 今は要らんが、一応実物を見ておきたいけんのう」

「勿論です」

石川は答えた。

契約が終つたのは、それから二時間ほどのことであつた。新東京製薬立川支社は、毎月、線維素溶ウリン系酵素製剤の「ウリナーゼ」六千国際単位を三千五百アンブル——それに添付——と、抗生物質、抗ガン剤、メージャー・トランキライザー、脳下垂体ホルモン剤、X線造影剤、人血清アルブミン製剤、人工腎臓灌洗用剤、人血漿タン白、放射性診断用試薬、乾燥グロビリン、それに意識障害治療薬などを値引き後価格で一千二百万円分を、安富病院のダミ——の黒小路商事に納入することになった。

それから三十分後、立川基地裏のハウスに戻つた石川は、黒小路商事のゴム印を彫刻刀を使って偽造した。

黒小路商事と交した契約書と金額を書き替えた契約書を偽造する。黒小路商事名義で納入後一ヶ月後に支払われる安富病院からの支払いが石川が受取りに行くことになっているから、偽造の事実が支社にバレるわけは無い。

黒小路商事のほうも、実際は新東京に納品させながら、そのうちの大部分を一流メーカーから納品させた形にするから、石川への支払いは、ほとんどが現金キャッシュなのだ。小切

手が混つても、石川が自分の口座で現金化してから支社に渡す。

いずれにしろ、石川が支社に知らせる値引き後の値と、黒小路商事こと安富病院と交した本物の契約書に書かれたダンピング値との差額は月に約二百三十万で、それが石川のポケットに入ってくる。

一時間ほどして新東京製薬立川支社に石川が戻ると、支社長の本島と営業一課長の安田だけが居残っていた。

「やっただんだな？」

すでに充分にアルコールが回った本島が握手の手を差しのべた。

「やりましたよ」

握手を返した石川は、業務用カバンから偽造契約書を取出した。そいつは、数字を間違えないようにコピーを取っている。

偽造契約書をじっくりと調べた本島と安田は、狂喜して抱きあった。コピーを数綴りとり、オリジナルを金庫に収めた本島は、

「さっそく、中華飯店かどつかで祝盃をあげるとするか？
機密費で落すから遠慮するな」

と、言った。

「明後日の午後、安富病院に納品に行きますので、午後までに品数を揃えておくように園部君にメモを残しておいてください」

石川は言った。

しばらくして、三人が歩いて行った立川駅近くの中華料理店「桜林」は、広東、北京、四川、上海といった各地方の料理がごっちゃ混ぜになった店であった。

まずは、紹興酒に漬けたカニをブツ切った酔蟹を囲んでマオタイ酒のグラスを挙げたが、アルコール・アレルギーの安田は、形式的にグラスに口をつけただけであった。それだけでも、強烈なアルコール臭で酔っ払ってくる。

三人は北京烤鸭と蜜入りマントウでしめくくる。駅の前で本島たちと別れた石川は、一度支社のビルに戻り、営業用のスバルを運転してアメリカン・ヴィレッヂのハウスに戻った。

ボブ・ラッセルに電話で連絡を取り、安富忠治の希望の娘を注文した。

電話を終ると急に酔いが回ってきた。素っ裸になり、毛糸の腹捲きをつけた石川はベッドに転がりこむ。すぐに眠

りの風に運び去られた。

翌々朝十時に目が覚めた石川は、一時間ほどランニングしてからシャワーを浴び、ボロニア・ソーセージと玉ネギのスライスを分厚く黒パンにはさんだものとトマト・ジュースで遅い朝食をとった。

新聞をゆっくり読んでから、新東京製薬立川支社に向った。着いたのは、ちょうど昼休みが終った頃であった。

黒小路商事ということにはなっているが実際は安富病院に納入する多量の薬品は、園部の手でまとめられていた。

石川はそれをチェックする。園部に手伝ってもらってスバル四駆に積みこむ。単価が高い注射用アンブルが多いから、乱暴に扱うことは出来ない。

安富病院の薬品庫にそれらを運びこみ、中沢事務長の指示通りに色々な一流メーカーの偽造納品書に書きこみを終えた時、安富忠治が理事長室から降りてきた。あいかわらずギンギラギンだ。

「どうや、今夜の、ハイチーンのグラマーなブロンドの件……話はついたんきゃの？」

と、ヒツヒツと笑い声をたてる。

「はい。理事長さんのために特に無理を言いまして、ハワ

イのヒツカム空軍基地勤務の一等兵を調達させました。十八歳です。特別休暇で日本に遊びに来ているんですが、日本の物価が高いので両親への土産も買えないので……そのう、アルバイトをやる気になったそうです……したがいまして、素人ですよ」

石川は調子よく言った。今夜忠治の相手をするミリーという娘は背丈が六フィートもある大女だから、小柄な忠治だと大木にセミがとまったような格好になるだろうな、と思う。

「ほうか、ほうか……何時に会うことになった？」

忠治はヨダレを垂らしそうになった。

「八時半です。場所は横浜」

「ほんじゃあ、このあいだの店でゆっくり夕飯を食うというわけにはあかんにゃあ。よし、分った。五時半に、この駐車場に來いや」

「失礼ですが、お身につけてらっしゃる高価な宝石類は

……」

「分っちゃる、分っちゃる。置いていくけん、安心せえ」

忠治は笑った。

2

安富病院を出た石川克也は、一度立川基地裏のアメリカ村の自分のハウスに戻り、納品書の書替えを行った。リーヴァイス・パンテラのスポーティな背広の三つ揃いやスポーツ・シャツも車に積んで新東京製薬立川支社に行った。「いやあ、納品のほうはいまういったんですが、今度は理事長のほうがアメリカ娘を抱かせろというんで、五時半にまた会うことになりましたね」

と、書類を安田営業一課長に差し出しながら言った。

「御苦労さんだな。そいつは交際費で何とかするよ。ところで、木島さんが話があるとおっしゃってる。直接聞いたら？」

安田が笑いながら言った。

二人の会話を聞いていた支社長の木島が、

「さっき本社から電話があつてな。例の国立北多摩大付属の内科医局の『新薬採用委員会』の実力者二人を買収する件……二人で四百万は高すぎるから、何とか三百五十万に押さえてくれないか、と本社は言ってるんだ。もし、その

金額に押さえることが出来たら、さっそく送金するというわけだ。なあ、石川君、何とかあの二人を説得してくれないか？」

と、言った。

もともと松崎助教授と吉村専任講師に渡すべきワイロは合計して三百万で、あとの百万は石川が自分のポケットに入れる計画であつた。石川は、

「この大事な際に、本社は何を血迷ってるんでしょね。五十万を出し惜しんで、せっかくの僕の工作がバーになった場合、本社は責任を取ってくれるんでしょうか？」

と、わざと憤慨（ふんがい）して見せる。

「まあ、まあ——」

木島がなだめ、声をひそめて、

「いよいよの場合は、あの病院にうちが売った薬の代金の一部を本社に隠して、その五十万をひねり出すさ。書類操作ならまかしといってくれ。薬の品数が合わなくても、そいつは追加添付で捲きあげられたということにするから」

「助かります」

「しかし、その前に、あの二人のセンセイに、話だけでもしてくれよ。頼む」

「分りました。ところで、今夜は安富忠治理事長にブロンドのハイティーンを抱かせなければなりません。抱き代は四百ドルですか、食事も付き合わされてますので、十五万ほど仮払いしていただけますか」

石川はサバを読んだ。ミリーの代金として組織に払うのは三百ドルだ。

「やむをえんだらう。あんなに大量の薬品の納入に成功したんだからな。しかし、あの親子はよっぽどブロンド娘が好きなんだな」

木島は肩をすくめた。

会計から交際費の仮払いを受けたり、洗面所で上半身を洗ってから着替えたりしているうちに五時が過ぎた。

石川は薬品の搬出入係り兼雑用係りの園部に京王線分倍河原駅^{がわら}まで支社の車で送ってもらってから、京王線を使って調布駅に向う。

安富忠治は、安富病院の有料駐車場で待っていた。今日の車は、ロールス・ロイスのなかでは一番スポーティな二ドアのカマルグだ。忠治はいかなる色彩感覚を持っているのか、ボディが金メッキでグリーン・ハウスが銀メッキであった。

そして今日の忠治のイデタチは、紫色のボロシャツとスパンコールが光る背広とパンタロン姿だ。エナメルシューズのハイ・ヒールは十五センチ以上の高さを持つ。銀色のミラー・グラスを掛けていた。

エンジンとエア・コンを掛けたロールス・ロイス・カマルグの後部座席で、ニヤニヤ笑いを浮かべた忠治は、石川に運転席^{運転席}につくようにとジェスチャーで示した。

コックピットに腰を降ろしてシートを調節しながら石川は、

「今日は特にお若く見えますね、理事長先生」

と、お世辞を言う。

「馬鹿もん。若く見えるんじゃないでや。俺あの体は本当に若いんじゃないわい。まだ四十台の肉体だと政治が太鼓判を押してくれよった」

忠治は笑い声をたてた。

「これは失言でした」

「まあ、ええ。まずは横浜の中華街で軽く飯でも食おうや」

忠治はカクテル・キャビネットからウオツカ・レモンをよく冷えて汗をかいだ罐を取出した。それを飲みながら、

メンタイの干物をかじる。

ロールスのカマルグをスムーズに運転して甲州街道に向いながら、石川は、

「政治先生はキャッシーをお気に入ってくださいます、私の面^{メン}子^シを立たせていただいた、というもので」と、言う。

「キャッシーちゅうのは、ええ娘だったらしいのう。政治の奴、白人コンプレックスが直ったちゅうて大喜びだ。また、政治にええ娘を世話してくれや」

「キャッシーのように若い娘はなかなか見つかりませんが……心掛けておきますので、よろしく……」

「ところで、今夜の俺らの相手は何ちゅう名だ？」

「エミリーですが、愛称でミリーと呼んでください」

「ミリーちゃんか——」

政治はイッヒツヒと笑い、

「俺あの注文通り、大柄でグラマーなブロンドけえ？」と、尋ねる。

「はい。身長百八十三センチ、体重は七十キロ近くあります」

「ほうか、ほうか。想像するだけでムスコが立ってきよ

たぜ。振り落されんように気をつけるべえ」

忠治は再び鄙^ひ猥^わな笑い声を立てた。左手をパンタロンのポケットに突っこんで愚息^{おんそく}を玩弄^{がんろう}する。

ロールスは甲州街道に出た。中央高速道に乗っても上りの車はまだ環状八号の高井戸インターで降りることは出来ないから、石川は甲州街道をそのまま環八のほうに向けて走らせた。

「おい、どないして高速に乗らんのだ？ 環八から第三京浜に入るんなら、永福まで一度行つてバックしたらええ。料金をケチる気きやあ？」

忠治がわめいた。

「そういう積りじゃありませんが、下りはラッシュ・アワーですのうで」

「俺あの言う通りにせえ」

「分りました」

石川はロールスを強引にUターンさせた。

調布インターから中央高速道に乗る。カマルグがスポーティと言つても車重が二・三トンもあるから、加速性能は大したことない。

首都高速の永福インターで降りる。井の頭通りの水道道

路交差点でＵターンして、首都高速に乗る。

環八も第三京浜もラッシュ・アワーであったから、ロールスが横浜中華街に着いたのは七時近かった。永福インタ―の近くから世田谷の住宅街を通って第三京浜の入口近くに出る抜け道を石川は知っているが、何しろ狭い道なので、ロールスに傷をつけて修理代を払わされたのではかなわな

い。
中華街のメイン・ストリートは、ウィーク・デイなので駐車が出来た。空いたスペースを見つけてロールスを駐めた石川は、

「申しわけありませんが、時間があんまり無いです。ミリーが待つてるのは、外人墓地の近くのマンションですから、ここから遠くは無いです……出来たら一時間少々で夕食を済まさない……」

と、頭をさげる。

「どの店でもええわい。小便が漏れそうじゃ」

パンタロンの前を押さえた忠治は、悲鳴をあげた。もう、かなりアルコールが回っている。

敷地二十万坪

1

「じゃあ、ここにしましょう。知らない店ですが」

石川克也はロールス・ロイス・カマルグを駐めたすぐ横の広東料理屋を示した。車から降りて、安富忠治のために助手席側のドアを開く。助手席を前に倒した。カマルグは二ドアだから、後部ドアは無い。

パンタロンの前を押さえた忠治は、その店に跳びこんだ。車にドア・ロックした石川は、店に入り、帳場の前の待合室のようになっているところで待つ。

しばらくして、忠治がトイレから出てきた。

「俺あが前から言つとるように、一千万円以下の安物車の販売を禁止せんから、あんなに道が混むんだばさ。もうちつとで漏らすところだったわい」

と、文句を言う。

「申しわけありません。それでは席につきましようか」

石川はマネージャーらしい黒服の男に手を挙げた。

客席は壁の一面が鏡張りになっていた。欧米人の客も多かった。紹興酒とマオタイ酒をチャンポンに飲みながら

アワビとピータンとクラゲの三色冷盤をつまむ忠治は、

欧米人の娘客を物色しつつ、

「俺あのミリーちゃんは、あれより別嬪かのう？」

と、機嫌を直してヤニさがる。

「少くとも、ここにいるどの娘よりもグラマーですよ」

石川は笑いながら言った。

メイン・ディッシュは、生後一ヶ月ほどの小豚の丸焼きであった。ペキン・ダックの烤鸭のように、皮付きのまま

餡色に焼きあげられている。

デザートは、果物の荔枝を食い終えても、忠治はまだ物足りなそうな顔をしていた。その矮軀と六十五歳近い年齢から見ると、ケタ外れの食欲だ。

鉄観音茶を飲んだ石川は、

「済みませんが、ミリーとの約束の時間が迫ってますので」

と、勘定書を掴んで中腰になった。

「おう、もうそんな時間きゃあ？ 腹八分目でねえと、戦いは出来んからのう。これぐらいで我慢しとくわい」

忠治は立上った。

表に出ると、金メッキと銀メッキのサイケなロールス・ロイス・カマルグを大勢の見物人が取囲んで批評をのべあっていた。アラブの石油成金の車ではないのか、と言っている者もいる。

一方通行になっている中華街のメイン・ストリートを抜けたロールスは、堀川を渡り元町のほうに入った。

丘を登り、「港の見える公園」の正門前で右折する。やがて右手の下に外人墓地と街の灯火の洪水がひろがった。

コール・ガール組織がミリーに続き部屋を貸し与えたマンションは、元山公園と道路をへだてたところに建っていた。七階建てだ。

ヴェトナム難民らしい駐車係りにチップを与えた石川は、忠治をマンションの玄関に案内した。

玄関ホールに並んだ郵便受けにつけられた名前は、ほとんどが外国人のものであった。管理人はインド・パキスタン系の浅黒いアリア人種で、訛りが強い英語を話した。

石川はその管理人に、コール・ガール組織に渡る三百ドルを入れた封筒を差し出した。

エレヴェーターに乗ると忠治は膝を小刻みに震わせはじめた。

「武者震いですか？ 日本男子の面目にかけて頑張ってください」

石川は笑った。

「そ、そうじゃ。む、武者震いじゃ……だけど、やっぱり、お前さんが寝室までついてきてくれるほうがええのう……ここは東京租界みたいなどころじゃけにい」

忠治は震え声で言った。

「御安心ください。私がついているかぎり、理事長先生の安全は保証出来まస్తుとも」

石川は答えた。

六階で停まったエレヴェーターから二人は降りた。十五センチ以上もあるヒールのエナメルの靴をはいている忠治は、ぐっと胸を反らせる。もう、震えはとまっていた。

石川は六一七号室のドアの脇に立ち、インターフォンのブザーを押した。

「誰なの？」

語尾をひきずる南部訛りの米語で、若い女の声が尋ねた。「今日は、オアフ島の風が強い」

石川は合言葉を言った。無論、英語でだ。中西部訛りの米語と言ったほうが正確だが。

「ちょっと待ってね」

娘は答えた。

二十秒ほどたってからドアが開く。

十八歳のミリーは、確かにグラマーと言うか大女であった。ハイ・ヒールをはいているので、百九十センチの石川と同じぐらいの背丈に見えた。

髪は赤味を帯びたブロンドで、腫の色は灰色がかった青。肌はミルク色だ。ネグリジェ越しに、圧倒的ヴォリュームの乳房がうかがえる。

石川がドアを閉じて、エール錠のロック・ボタンを押すと、ミリーはチェーン・ロックを掛けた。

「やあ、ミリー。僕はカツヤ。この紳士がドクター・チュージ。呼びにくいだろうからチューと呼んでくれ。僕は通訳だから、黒子のようなものだ。僕の存在は無視してくれ」

石川は言った。